

## 自然災害時における宗教界および宗教者の歴史民俗学的研究 —18世紀普賢岳の噴火・地震を中心として—

根 井 浄

寛政4年(1792)4月、肥前国島原半島の中央にそびえる雲仙・普賢岳が噴火した。これをうけて島原の眉山が崩壊するという大惨事がおきた。地震と高波による被害は島原城下をはじめ、有明海対岸の熊本にもおよんだ。「島原大變、肥後迷惑」の俚言を生んだ自然災害である。

『寛政四壬子年島原山焼山水高波一件』によると、島原町村在住の流死人は男4,018人、女4,817人といわれ、そのほか、神社15ヶ所、寺院10ヶ所、出家10人、社人3人、山伏10人、盲僧4人が死亡したといい、とりわけ宗教者の被害をことこまやかに記録している。また『島原大變記』には「江東寺、桜井寺、護国寺、光伝寺、和光院、快光院、崇台寺、安養寺、善法寺、浄源寺、右拾ヶ寺一字も残らず流出しけり、其外修験者請持の小堂、数を知らず」とあり、城下にあった宗教施設のほぼ全滅を報告している。

雲仙岳は近代まで温泉山と表記して「うんぜんさん」と呼ばれた。16世紀半ばに当該地域にキリシタンが伝来するまでは肥前国でも有数の山岳信仰の山として知られ、いわゆる修験の山であった。江戸期に発生した大地變の前後において島原藩は対応に追われ、噴火の状況を詳しく幕府に報告するとともに、藩内では寺院神社の枠をこえた宗教者たちによる地震鎮静の祈祷がおこなわれた。まずもって島原藩の精神的支柱となっていた雲仙・普賢神社の普賢菩薩像を本尊とし、満明寺一乗院(真言宗)と小浜村の修験・覚王院が藩命によって真言秘密法による地震鎮静の祈祷を繰り返した。

島原半島の宗教史全般を語る場合、歴史上で著名なキリシタン伝来から島原の乱による宗教界の動きが常に引き合いに出されるが、18世紀末におきた寛政4年の島原大地變による宗教界の動向も重要であろう。ことに藩内の仏教寺院による活動と役割は注目され、島原の快光院、三会村専光寺、多比良村正覚寺、安德村徳法寺、布津村円通寺、隈田村龍泉寺、南有馬村常光寺は流死人の供養法要にあたり、藩主の菩提寺であった本光寺は海浜で施餓鬼法をおこなった。また溺死人が多く集まった島原城下、安德村、三会村、多比良村、布津村、隈田村、南有馬村には、それぞれ「流死菩提供養」の石塔が建立された。いまでも現存しており石塔にはいずれも「流死菩提供養塔 寛政四壬子四月朔日 高波」と銘文が確認できる。

かくて寛政4年の島原大地變は、全国の宗教界にも影響を与えた。とりわけ敏感に反応したのは信州の善光寺教団で、4年後の寛政8年、善光寺は島原に下向して出開帳をおこない、島原の海岸では大地變の亡霊供養として大念仏をおこなった。近代においても自然災害地に各役割をもって多くの人々が集まる現象は不変だが、その前例として江戸期・雲仙岳の噴火にともなう地元の宗教界の個々人の行動と役割が知られる。今後も全国的視野をもって自然災害時における宗教人の動向と役割についてさらなる調査研究が必要と思われる。また当時の古記録(災害史資料)を検証することは近代科学分野にも裨益することになるだろう。